

### 3区の調査概要

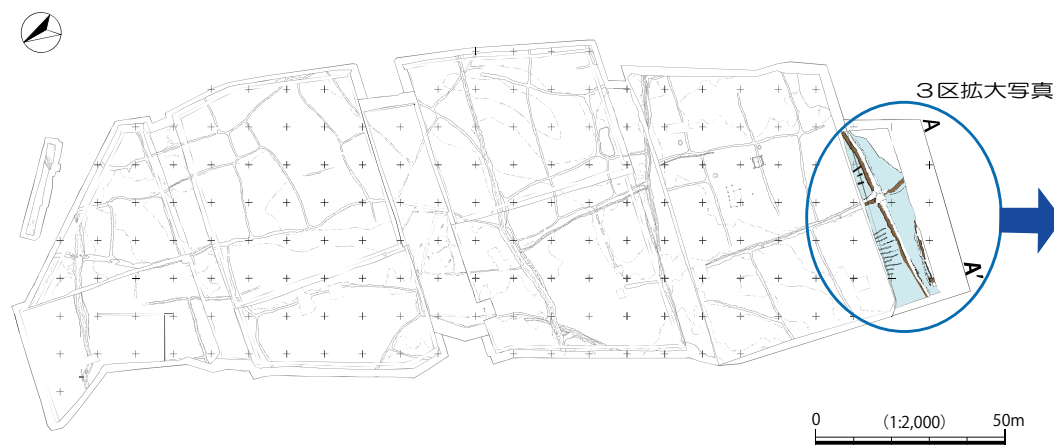
丘江遺跡の北側に広がる水田域（生産域）は、これまでの調査により、東西約80m、南北約250m以上の範囲に及ぶことがわかっています（第1・2図）。今回調査を行なった3区は、ちょうど水田域と集落域の境にあたり（第2図）、上層、中層、下層、最下層で遺構を確認しました。

上層では、畦畔（あぜ）で方形状に区画された水田4枚（第1図・写真①）と溝状遺構（水路）・畠跡などを、中・下層では水田を7枚確認しました（第2図、写真②～⑥）。これまで行なわれた調査の結果、上層の水田は安土桃山時代（16世紀末）頃、中・下層の水田は鎌倉～室町時代（13～15世紀）頃と推定されています。

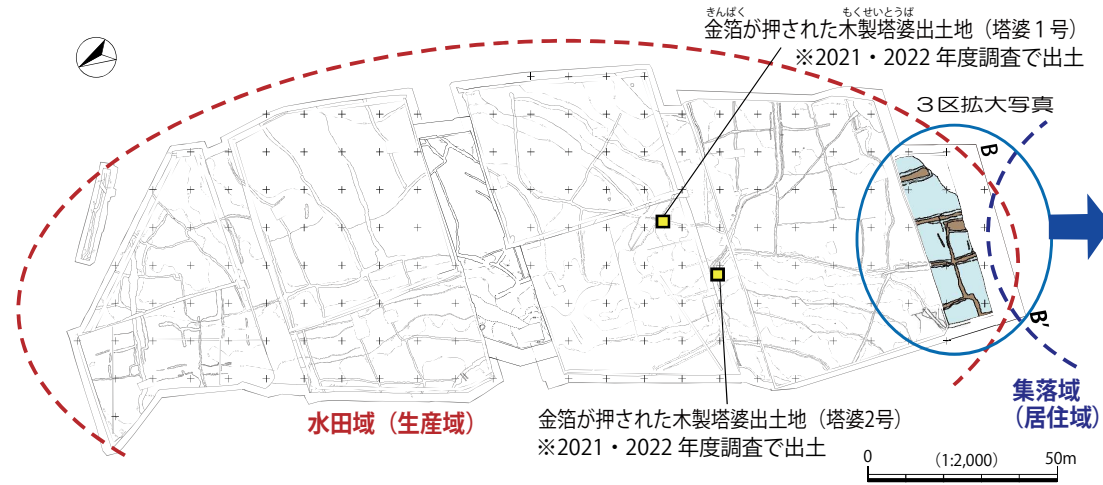
なお、注目すべき遺構として、中・下層で確認した畦畔状の遺構があげられます（写真③）。丘江遺跡の畦畔は、最も大きなものでも幅1.5m程度であるのに対し、この畦畔状の遺構は、幅3m、残存高0.4m（盛土含む）を超える大規模なもので、畦畔であるとするれば丘江遺跡内では最大規模と考えられますが、両脇に浅い溝を伴い、直線的に伸びずに途切れるなどの特徴からみて、水田畦畔とは考えにくく、集落域と水田域とを繋ぐ道の遺構の可能性が高いと考えられます。

最下層では平安時代の竪穴建物（写真⑧）や、幅2m×深さ0.5m、長さ75mを超える大溝、柱穴・ピット群（写真⑦）などを確認しました。

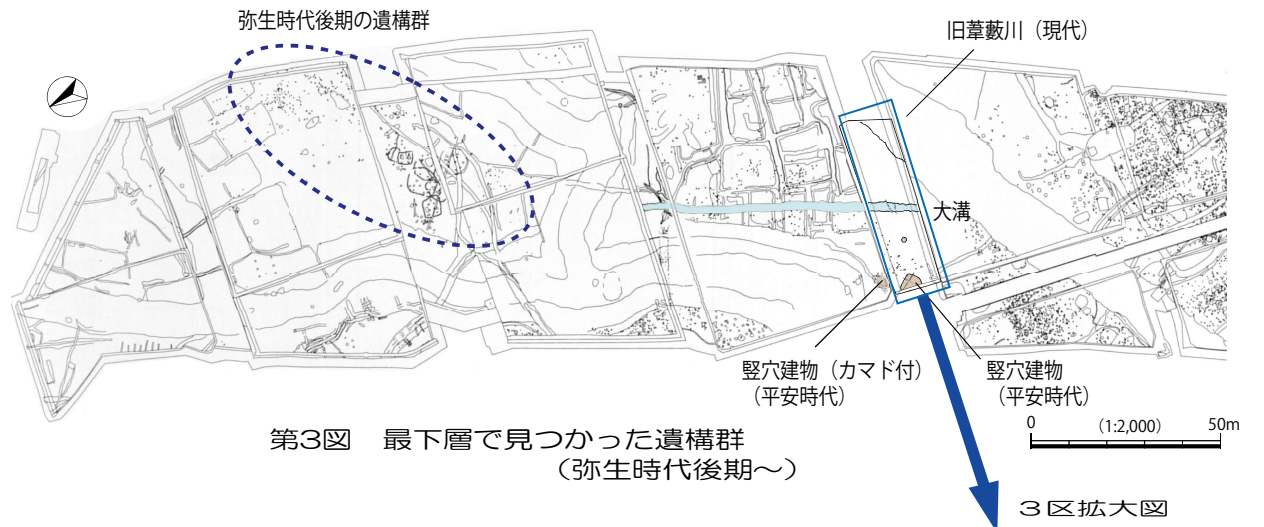
今回の調査により、鎌倉時代から安土桃山時代にかけての水田域の南限がほぼ確定するとともに、鎌倉時代に水田化する以前の丘江遺跡の様相を知る上で貴重な成果を得ることができました。



第1図 上層で見つかった水田跡（安土桃山時代）



第2図 中・下層で見つかった水田跡（鎌倉～室町時代）



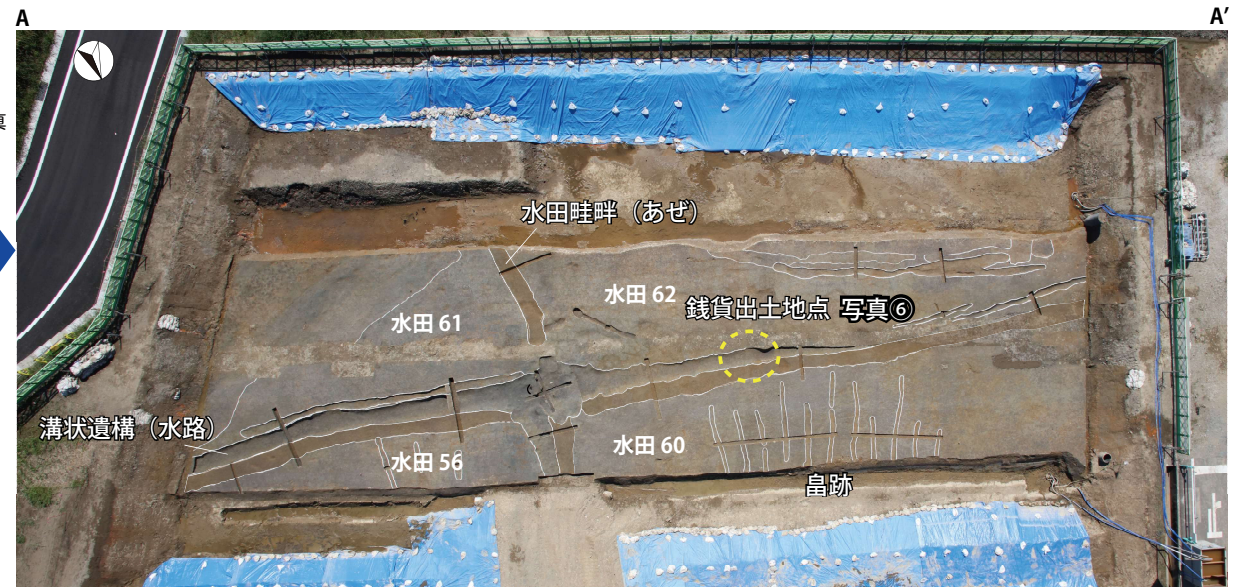
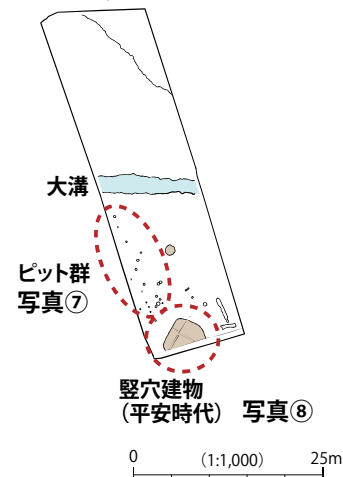
第3図 最下層で見つかった遺構群（弥生時代後期～）



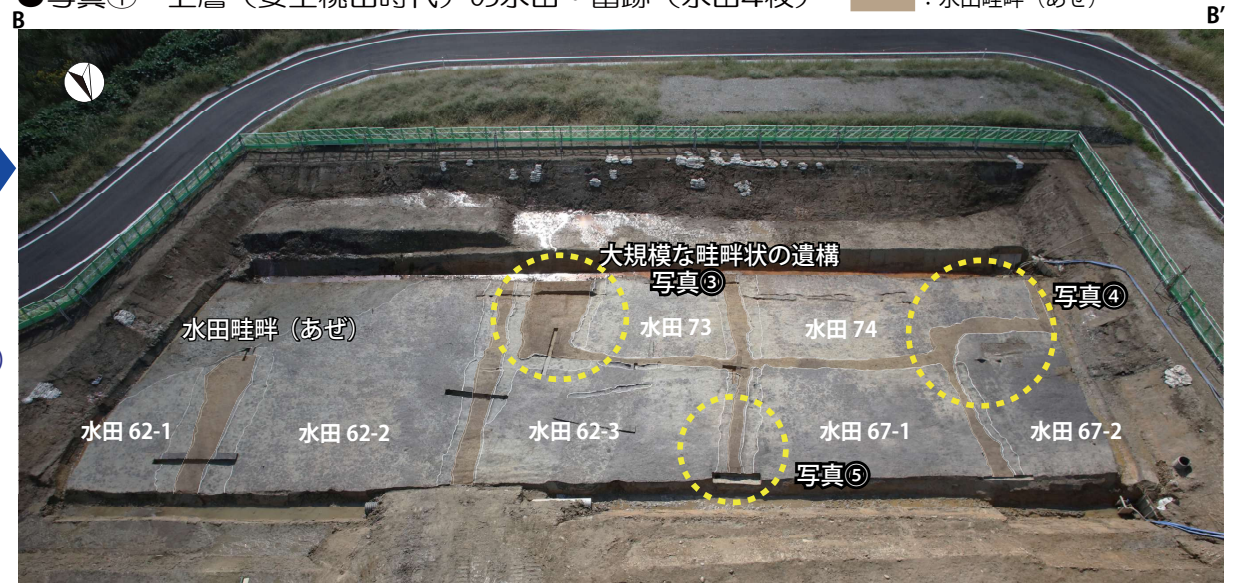
●写真⑦ 柱穴・ピット群



●写真⑧ 竪穴建物（平安時代）



●写真① 上層（安土桃山時代）の水田・畠跡（水田4枚）



●写真② 中・下層（鎌倉～室町時代）の水田跡（水田7枚）



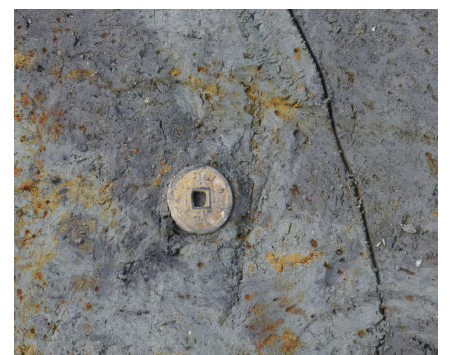
●写真③ 大規模な畦畔状の遺構



●写真④ 踏み抜き痕（足跡・耕作痕など）



●写真⑤ 带状に残る水田の畦畔（あぜ）



●写真⑥ 上層の畦畔内から出土した銭貨（洪武通寶）